

江分利満氏
の華麗な生
活 山口瞳



文藝春秋新社

江分利満氏の華麗な生活

山口瞳

江分利満氏の華麗な生活

昭和38年12月1日発行
定価350円

著者 山口 瞳

発行者 小野 詮造

発行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座西8の4

印刷 図書印刷

製本 加藤製本

目次

三人姉妹	5
サラリーマンいろは歌留多	35
洒落梯子	55
大日本酒乱之会	75
続・大日本酒乱之会	89
草野球必勝法	115
すみれの花咲く頃	131
女	151
好き嫌い	167
今年の夏	183
伝法水滸伝	201
林間ホテル	233

*

題 裝
字 幀
伊 柳
丹 原
一 良
三 平

江分利満氏の華麗な生活

三人姊妹



I

「あらッ！」

坂本昭子がふりむいて言った。

「あら、それは違うわ」

昼休みの屋上である。球戯は禁止されているが、バドミントンならよい。

バドミントンと囲いのあるゴルフ練習場。陽だまりには女子社員がビッチリとならんでいる。体操の真似ごとや、深呼吸してからゆっくり駆けだしたりするのは男の社員である。

3月の終り、といっても屋上は風があるから、太陽がありがたい。ベンチが7つか8つあって、常連が占領している。バーのボックスみたいのに、あたしはいつもココときめているようだ。そこでコーラとホットドッグで昼食する者もいる。

「それは、反対だと思います」

「反対？」

坂本昭子と江分利は、議事堂と東京タワーの見える側の金網に寄りかかっていた。ふたりならんで遠くを見ていたのが、急に昭子が江分利をふりむいたのだ。

思いつめたような表情になっていた。

江分利は冗談みたいに、君たちがうらやましいと言ったのだ。春ならば小旅行、夏になると登山と海水浴、夜のプール。秋も高原への旅。冬はスキー、スケート。げんに、昭子は2週間まえにスキーから帰ってきて、雪やけがまだ残っていた。白いきれいな肌をしているから、雪やけはもうすぐ消えてしまうだろうが……

若い社員は、会社の厚生施設や健康保険組合の寮や指定のホテルを実に巧みに利用する。山にも海にも2百円ぐらいで泊まれる設備がある。プールには割引の回数券がある。志賀高原には会社のヒュッテがある。会社からスキーバスが出る。

最近では会社が費用をだして、若い社員に自動車の免許をとらせる。宣伝車ならガソリン代ももつてくれるから、それでドライブすることもできる。

もちろん、独身の男の社員と若い女の社員が、5人とか6人とかでグループをつくって一緒に旅行するのだ。そのほうが、安全だという。登山やスキーなら、むろん男がいたほうが安全だろう。しかし江分利には“安全”ということばに抵抗を感じる何かがある。むしろ“あぶない”といわれたほうが、ピッタリくる。

36歳の江分利は、それに参加したことがない。強引に誘われることもあるが、女房と子どもを置いて

て旅行するという気になれない。「奥さんも坊ちゃんも連れていらっしやいよ」といわれるが、いわば「青春」のかたまりみたいところへ、女房、子どもと参加したときの違和感がすぐ見えてくる。それに、江分利には会社の厚生施設を利用したりすることにも、ある種の抵抗があるのだ。これは自分でも説明のしようがない。

毎年の秋の社内旅行にだけは行く。中堅社員がそれに参加するのは義務のようになっている。宴会が終ったあとのピンポン場、ダンスホールでは笑いがたえぬ。夜がふけると、チークダンスが何組もできる。それをときどきのぞきにいつて適度にからかうことも、江分利には義務のように思えてくる。「あんまり、真剣になっちゃいけないぞ」

しかし、若い連中にいわせると、それもおかしいという。読みが浅いなあ、と言われる。社内旅行はだれとだれとがホンモノかを調べる絶好のチャンスだという。江分利とは逆のやり方で彼らはそれを調査するのである。

社内旅行では、必ず全員の記念撮影がある。だれとだれとが寄り添っている、だれとだれとが手をつないでいる、あの子とあの子が仲好さそうにしている、というのはむしろ陽動作戦と見るべきだという。そんなことじゃ、トモモジヤナイかわからないという。

記念撮影を見て、だれとだれとだれが参加していないか、つまり欠席しているのはだれかということ調べて組み合わせをつくれれば、一発でわかるという。

なるほどねえ。旅支度で出る。家で疑う者はない。方向をすこしはずして、2泊して帰ればよい。年に1度の社内旅行は、むしろ欠席を予定しているカップルにとっての最大の楽しみになっているの

だ。それもはじめ出席の届けをだしておいて、前日になって叔母さんの病氣かなんかで取り消す奴が、いちばんクサイという。さすがに当事者は江分利などよりはるかに真剣に考えているわけだ。

「反対よウ」

坂本昭子は、自分がムキになったことに照れたように、今度は笑った。きれいになったなあ、急に肌がツヤツヤしてきた。

つい5日ほど前のことだが、江分利が手相を見てあげるといふと、昭子はすなおに、両手を出した。そうして、ふざけて「私は、処女かそうでないかわかるんだよ」といったら、あわてて掌をひっこめた。それを見ていた奴が、昭子はあやしいという。そんなことはない。突然、妙なことをいったからあわてただけの話だ。まあ、そうであったとしてもよい。昭子は入社して満2年、ちょうど20歳である。「だってねえ、私たち、小学校、中学校、高等学校、ずっと共学でしょう？　だから駄目なのよ」

「駄目？」

「ムードがないのよ」

「だけど私たちの時代はね、中学生、年齢でいうといまの高校生ぐらいだけどね、それでも映画を観ることも、いけなかったんだよ。補導協会なんてのがあってね、掴まっちゃうんだ」

「知ってる。叔父さんに聞いたわ」

叔父さんということばに江分利はギョツとした。昭子とは16歳もちがうんだなあ。

「喫茶店にはいってもいけないんだ」

「……」

「教練の先生が、私たちを集めてね、怒ったんだ。」近ごろは学校の帰りにフルーツへ行くと奴がある」
「ってね。フルーツパーラーのことをフルーツっていうんだ。真赤になって怒っているんだ」

「いいムードじゃない？」

「デートなんて考えたこともない」

「……」

「だいたいデートってことはきらいでね。きらいというよりデートっていうと日付って意味のほうがいいときちやうなあ。私たちは嬌曳^{あひびき}っていったもんだよ。嬌曳という字を見ただけでドキドキしたもんだ」

「すてきじゃない」

「ステキなもんかね。女の子と一緒に旅行するなんて、とんでもないことだった」

「それがいいのよ」

「いいっていったって勘当されるんだぞ」

「そこを、行くところがすてきなんだわ」

「君たちはね、しじゅうどっかへ行っているじゃないか、ドライブしたりスキーに行ったり……」

「だから駄目なのよ、馴れっこになっちゃってね、感激がないのよ」

「しかし……うらやましいなあ」

「反対よ」昭子は、またさきほどの真剣な目つきにもどった。

「うらやましいのは、こっちだわ」

江分利にはわからない、昭子の気持が。昭子の年ごろの女子社員、25歳までの独身男性社員の気持がもうわからなくなっている。

昭子は有能な女子社員である。事務処理が正確で、すばやい。勤務中はムダ口をきかない。午後5時になると、机の上をさつと片づけて、帰るときに課長に「さよなら」という。「じゃ、さよなら」ともいう。課長は近ごろの女の子は変ったね、と言う。昔の女事務員は課長より先に帰るなんてことはなかった。課長の周辺の世話までした。先に帰るときも「さよなら」とはいわなかった。課長の正面にきて固く頭をさげて「お先に失礼いたします」といったものだという。昭子のようにオーバーコートをきたままで、課長の席の横をハイヒールの踵を鳴らして通り抜けながら、にっこり笑って「じゃ、さよなら」とは言わなかったという。「変ったなあ」と嘆息する。江分利も、変ったとは思いますが、そのことでは、むしろ昭子の態度を「よい」と思う。そういう昭子の態度を好ましいとさえ思う。好きだ。

江分利が昭子や昭子の年代の女子社員に関して分らないと思うのは、もっと別のことだ。

「だってね、私たちのはね、恋愛じゃないのよ」

「恋愛じゃ、ない？」

「そうよ」

「嘘つけ！」

「ほんとよ、ドライブや旅行やチークダンスやナイトクラブは恋愛じゃないのよ」

「そんなことはないでしょう」

「わかってないのねえ。あんなの、ツマンナイ」

「だって、そのまま社内結婚ってのが多いじゃないか？ 今年は本社だけで5組は固いつて部長がいつたぜ」

「3組は確実ね」

「いや、部長は仲人を頼まれるからね。ビーバー（部長のニックネーム）の情報はたしかだぜ」

「そうかもしれないけれどね、結婚と恋愛はちがうのよ」

「結婚と恋愛は……」

江分利はこういう図式的な表現を好まない。昭子は何をいおうとしているのか。

「分からない人ねえ、係長さんって」

昭和37年の暮に江分利は係長に昇進した。思いがけないことであった。係長は出世コースの第1段階である場合と年功の場合とがある。36歳の係長は、どっちなのだろうか。

「係長さんねえ、私たちの結婚は計算なのよ」

咄嗟にはわからない。計算？

「だって、そうでしょう。高校生になると『男女交際』がはじまるのよ。男を何人も知っちゃうのよ、変な意味じゃなくてよ……。裏も表も見えちゃうの。手を握ったり、腕を組んだり、チークしたり、平気になっちゃう。私だってボーイフレンドが10人ぐらいいるわ。会社とは無関係によ。それに会社

の人を加えると……」

「……」

「わかるでしょ。私なんか駄目で、もっとスゴイことしている人いるんだから」

昭子は、あかくなった。

「だからね、自然に計算になっちゃうの。そう思いたくなくても自然に比較しちゃうのね。学校のと
きから、男と女は複数でつきあえて言われるでしょう。複数でなら交際してもいいっていわれるの。
私、あれ、イケナイと思う」

「そういう、もんですかねえ」

昼休みは終りに近づいていた。

「ハンサムでスマートだけど、どっか頼りない人。まじめで、真剣で、ご誠実で、課長までは間違
なくいけると思うけど、近眼で、ちっちゃくてツマライひと。精力があり余っていて、男性的で、
若いくせになんでも知っていて、会議なんかで課長さんたちを手玉にとっちゃうひと。だけど結婚し
たらすぐ浮気しそうな人。ねえ、係長さん、あなたなら、この3人のうちでだれをえらびます？」

昭子は急に早口になり、額にシワをつくった。愁い顔のつもりなのだろうか。昼休みの晴れた日の
屋上の若い憂愁という奴も悪くない。昭子の気持が、ぐっと近寄ってくるように感じた。すこしわか
ってきた。

「パツと会って、パツと好きになって、次になかなか会えない、なんてすてきだわ。係長さんの時代
には、それがあつたんじゃない？」